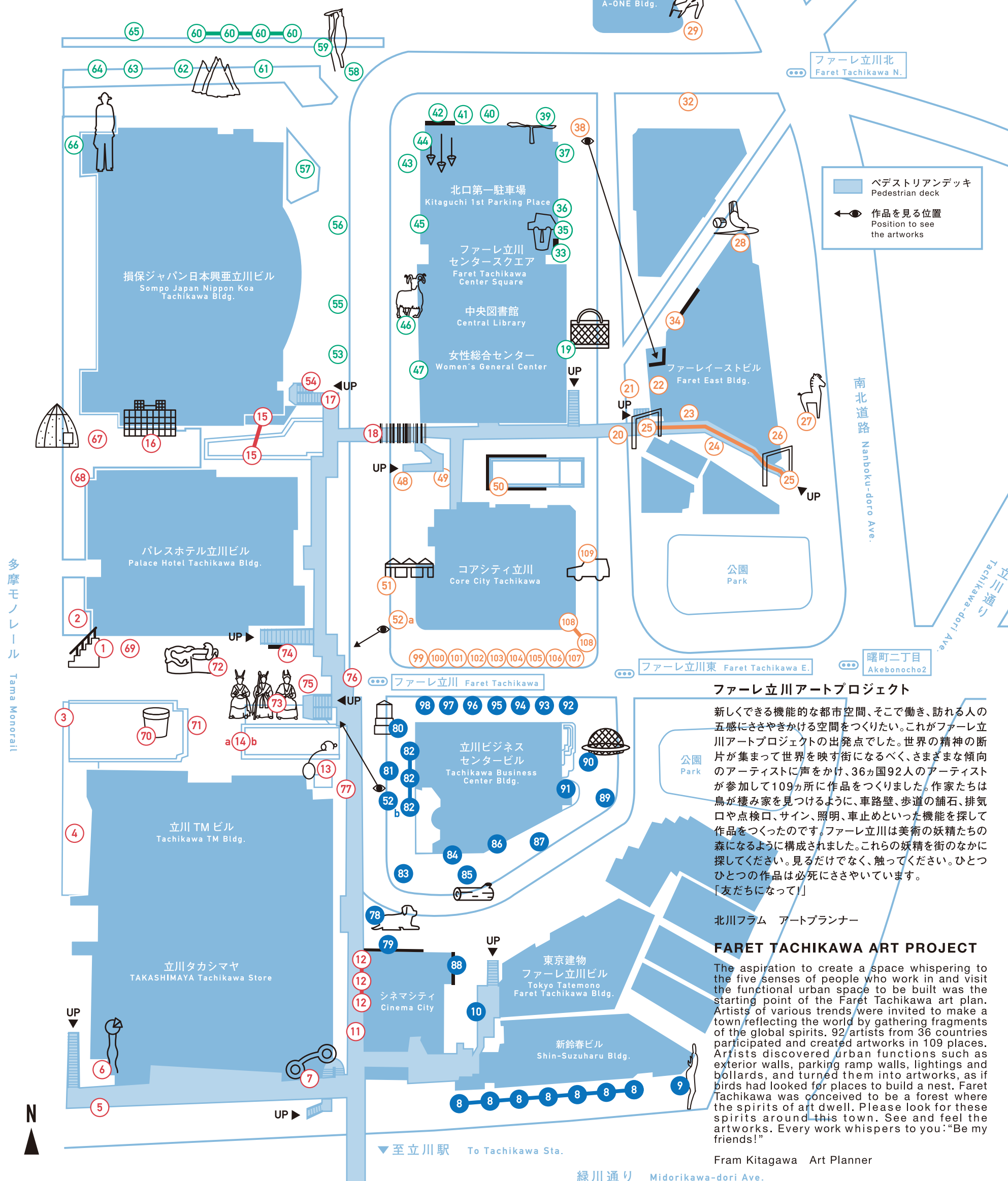


FARET TACHIKAWA ART MAP

ファーレ立川アートマップ



ファーレ立川アートプロジェクト

新しくできる機能的な都市空間、そこで働き、訪れる人の五感にささやきかける空間をつくりたい。これがファーレ立川アートプロジェクトの出発点でした。世界の精神の断片が集まって世界を映す街になるべく、さまざまな傾向のアーティストに声をかけ、36カ国92人のアーティストが参加して109カ所に作品をつくりました。作家たちは鳥が棲み家を見つけるように、車路壁、歩道の舗石、排気口や点検口、サイン、照明、車止めといった機能を探して作品をつくったのです。ファーレ立川は美術の妖精たちの森になるように構成されました。これらの妖精を街のなかに探してください。見るだけでなく、触ってください。ひとつひとつの作品は必死にささやいています。「友だちになって!」

北川フラム アートプランナー

FARET TACHIKAWA ART PROJECT

The aspiration to create a space whispering to the five senses of people who work in and visit the functional urban space to be built was the starting point of the Faret Tachikawa art plan. Artists of various trends were invited to make a town reflecting the world by gathering fragments of the global spirits. 92 artists from 36 countries participated and created artworks in 109 places. Artists discovered urban functions such as exterior walls, parking ramp walls, lightings and bollards, and turned them into artworks, as if birds had looked for places to build a nest. Faret Tachikawa was conceived to be a forest where the spirits of art dwell. Please look for these spirits around this town. See and feel the artworks. Every work whispers to you: "Be my friends!"

Fram Kitagawa Art Planner



8
□長澤伸穂 日本 1960-
Nobuho Nagasawa Japan 1960-
「トンボヒコキのメッセージ」
「Dragonfly + Airplane = Dragonplane」
ツリーサークル tree grates

長澤伸穂は大地のなかで土を建物のようにもあげ野焼した作品を以前つくりました。それ以来、つくられる場所のもっている特性や時間的なものにこだわってきているようです。この地域に幼い頃住んでいた記憶としてのトンボと日本で最初の飛行場があり、米軍の基地でもあった立川の歴史を組み合わせ、飛行機とトンボが変化していく形をつくったのです。



9
□エステル・アルバルダネ ス페인 1947-2004
Esther Albardané Spain 1947-2004
「タチカワの女たち」「Tachikawa Women」
道祖神 guardian deity figure

エステルは窓の外を所在なげに見て、何かを待っている女性をよく描きます。その女性たちが頭に乗せているのは魚や月形のもので、それが何なのか聞いても教えてもらえませんでした。女性たちがいつも待っているだけなのが同じ女性である彼女には残念なので、彫刻の形はシンプルですが、確かなデッサンに支えられた姿は美しい。犬は作家の大好きな動物です。



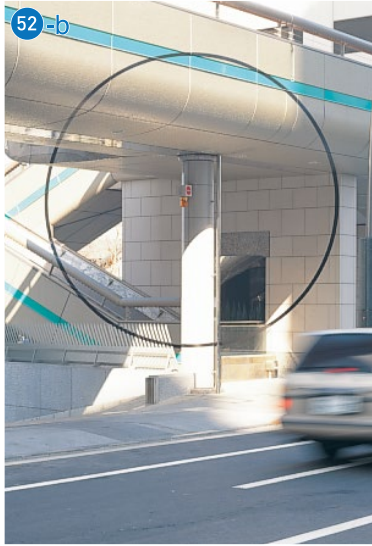
78
□ゲオルギー・チャブカノフ ブルガリア 1934-
Georgi Tchapkanov Bulgaria 1934-
道祖神 guardian deity figure

彼はいつもデッサンをしています。そのドローイングはスピードがあっけいきいしています。肖像彫刻も得意ですが、今回は立川の鉄屑屋さんをまわって、昔使われた農機具の残骸を集めてきました。耕起機の羽根は羊の角だとか、材料を見ながらどういう動物をつくるか考えていくのでした。しかし機械はとがっていたりするので、街のなかに置くために安全にするのが一工夫でした。



10
□メナシェ・カディシュマン イスラエル 1932-2015
Menashe Kadishman Israel 1932-2015
「自然は微笑まず、人は微笑む」「Nature does not smile ; people do」
ペDESTリアン側壁 pedestrian deck wall

彼は主として鉄板を使った立体をつくりますが、それ以外の仕事のなかにも羊がよく出てきます。羊は人間の悲劇とともに歩んできた彼の友達なのです。彼はユダヤ人で、アラブとイスラエルの戦争の悲劇をテーマにしていることも多いのですが、そこには自分の出身や民族の範囲を超えた人間の悲しさが出ています。彼の仕事からは鉄がやわらかな素材だということが伝わってきます。



52
□フェリーチェ・ヴァリーニ スイス / フランス 1952-
Felice Varini Switzerland / France 1952-
「背中あわせの円」
「Circles Back to Back」
ペDESTリアンデッキサイン
pedestrian deck sign

ヴァリーニは複雑な空間を選んでそこに色を塗るのです。ギザギザであったり直線であったり、切れていたりする。しかし、それらの太さが違う切れた線は、ある1点から見るとひとつの真円になっている。その驚きをつくります。円に見えるのはただ1点だけでそれは見ること空間の構造の不思議さを教えてくれるのです。この円は都市にある秘密の暗号ともいえるようです。



79
□スティーヴン・アントナコス ギリシャ / アメリカ 1926-
Stephen Antonakos Greece / USA 1926-
「Thio-2」
壁面照明サイン illuminated sign

アントナコスはネオンという線と色をもつ素材を使って都市のなかに朝、昼、夕、夜と違った表情をつくります。2オの時にギリシャからアメリカに渡った彼のネオンの作品からはどこかカタコンベ(地下墓地)にすかに光る灯のようなつましくもやわらかな表情が伝わってきます。彼のネオンは都会の夜に咲くやさしい花となりました。



80
□ジョゼ・デ・ギマランイス ポルトガル 1939-
José de Guimarães Portugal 1939-
「偶像」「Idol」
オブジェ object

ギマランイスは赤、黄、緑、青などのはっきりした原色を使った楽しい人間の姿をよく描きます。立川では、タイルを寄せ集めた作品をつくりました。こういうモザイクはバルセロナ生まれのミロやガウディの仕事の思い出させます。ポルトガルもバルセロナも海と空と大地の強い色の影響を受けているからかもしれません。



81
□岡本敦生 日本 1952-
Atsuo Okamoto Japan 1952-
「黄色の種類」
「Kinds of Yellow」
車止め bollard

岡本敦生の石の作品は崩れたり、切り取られながら大地とかかわっているところに特色があります。石がもともと大地から切りだされてくる、その初原の姿を想像させるのです。自然のなかからでてくる形です。今回は本来置かれるふたつの車止めの範囲に石とブロンズで柵のような形をつくりました。あたかも古墳からできた石と真鍮のような感じです。



82
□河口龍夫 日本 1940-
Tatsuo Kawaguchi Japan 1940-
「関係-未来・2116年・関係-未来・2132年・関係-未来・2155年」
「Relation-Future 2116, Relation-Future 2132, Relation-Future 2155」
木のつづ文 letters tied to trees
河口龍夫は時間や物質の関係を見せようとする作家です。ここでは街に植えられた3本の桂の木にそれぞれ直径の違った3つの銅の輪をはめました。この輪はそれぞれ、2116年、2132年、2155年に予定される木の幹の太さなのです。私たちがそれを見て都市のなかに移植された木の生命とその未来に思いをはせ、人間自体を考えるという仕掛けになっているのです。



83
□タデウス・ミスロウスキー ポーランド 1943-
Tadeusz Myslowski Poland 1943-
車止め bollards

ミスロウスキーはニューヨークにやってきて驚き、そのプラン(街の平面図)を操作した末にそこに美しい方形のユニットを見つけた。地図は世界や宇宙にまでつながるファンタジーであり、宝島なのです。それが彼のつくる最小単位の形になりました。今回は上部が異なった4つの車止めを鉄でつくりました。世界を極端にまでつきつめた形をつくるのが彼のねらいです。



84
□江上計太 日本 1951-
Keita Egami Japan 1951-
換気塔 ventilation tower

江上計太は仕切られた形(グリッド)の組み合わせによる仕事をします。ここではふたつの作品、換気塔の天蓋と、ビルのてっぺんのワイヤーによるクモの巣をつくりました。金属の線の奥に見える青空は、時に無限に広がる青空よりも一層青い色を意識させることがあります。彼の作品は仕切ることによってより想像力をはばたかせる日本古来の哲学に似ているともいえるようです。



85
□西雅秋 日本 1946-
Masaaki Nishi Japan 1946-
「遡る大木」
「A Huge Tree in Ascent」
車止め (ベンチ) bollard (bench)

ここにあるのは大木の、伐られ倒され横たわっている姿です。それはブロンズでできていて、この街では車止めとして機能し、ある時はベンチにもなる。西雅秋は金属の腐蝕によって時間というものを考えさせる作品をつくります。時間の違いが物質にもたらす差異が美しさをつくることもあり、また見る人の心の状態によって作品は変わります。作品にも人生があるのです。



86
□フランシスコ・インファンテ ロシア 1943-
Francisco Infante Russia 1943-
機械搬入口
equipment loading entrance

彼は現代の機械文明と芸術を結びつけようとしています。普段は写真を使いながら、自然という画面を操作することによって思いもしない人工と自然の調和の瞬間をつくりだすのです。彼は旧ソ連体制のなかでも新しい仕事をし続け、今もその展開を続けている作家です。立川では、実(絵を描いた陶板)を虚(鏡面ステンレス)に反射させることでいつもの考えを都市のなかに実現しました。



87
□沈文燮(シン・ムン・サップ) 韓国 1942-
Shim, Moon Seup Korea 1942-
「開く」「Opening Up」
車止め bollard

シン・ムン・サップは素材の思っけもない特質をあらわにする作家です。今までは天然の素材―土、木、石をよく使ってきました。今回は鉄で古代の建物の一部が白目のなかにさらけだされたような作品をつくりました。それは彼が物質の特性に隠された記憶を表現しようとしているからなのです。彼は木や石がそれ自体でもっている沈黙の声をくためる形態をつくりだしているのです。



88
□フェリックス・ゴンザレス＝トレス キューバ 1957-1996
Felix Gonzalez-Torres Cuba 1957-1996
非常階段看板
billboard on the emergency staircase

トレスは、生活の場であるが身近に感じている問題意識を拡大して公共の場にもちこみ、それによって人びとに日頃忘れられていることを思い起こさせたりする作品をつくってきました。「愛」や「希望」という一見あたりまえでありながら忘れがちな問題を扱ったりするのです。立川では、永遠の時の流れと、空をよる鳥の拡大した写真(看板)を通して伝えているのです。



89
□ジャウマ・ブレンサ ス페인 1955-
Jaume Plensa Spain 1955-
車止め bollard

ブレンサは鉄そのものの形の上に、鉄による字を彫りつける作品をつくります。彼は詩人のように鉄を通してうたいます。「ファーレ立川」が美しいのは、才能あるアーティストそれぞれが、都市の生きた一部となっていることです。ひとつひとつの作品は、それぞれの変化する織物の上に広がる精神の小さな点であり、観客に対し自らを絶えず開いていく小さな質問者なのです。そこには記念碑も賛辞もありません。



90
□マーティン・ブーリエ アメリカ 1941-
Martin Puryear USA 1941-
ベンチ bench

ブーリエは木や竹といった自然の素材を使って美しい形をつくる作家です。その形は私たちが失ってしまったしなやかな曲線と、軽やかなリズムをもっています。強く太い線と消えるような線がその特色となっています。ブーリエのねらいは御影石のうに浮かぶステンレスでできた「透明な鳥」をつくることにあったのです。



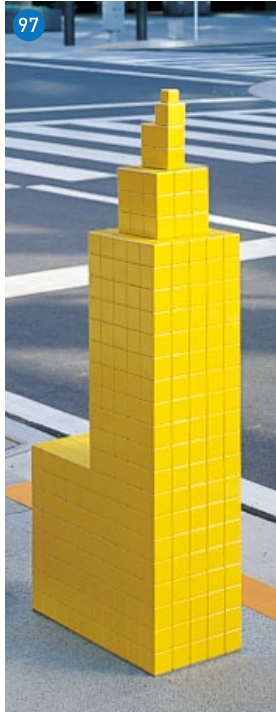
91
□チャールズ・ウォーゼン アメリカ 1958-
Charles Worthen USA 1958-
「水瓶」「Water Quiver」
散水栓カバー water faucet cover

ウォーゼンはチューブを使った有機的な形をよく使います。今回つくった4つの散水栓のためのカバーはすべて植栽のなかにあります。植栽は街が存在する以前にあった自然の緑を思い起こさせます。昔、人びとは水を井戸から汲み上げ、家まで器で運びました。その器のようなもので散水栓のカバーをつくらうと考えたのです。この器は、水を考える際に重要な、象徴的な意味をもっています。



92
□ゴンザロ・フォンセカ ウルグアイ 1922-1997
Gonzalo Fonseca Uruguay 1922-1997
「ベマ」「Bema」
車止め bollard

この作品は作家自身によると、石でできた照明灯のようなものです。そこにあって周囲を照らす光。フォンセカにとって、光とは古代から時を経て宿り続ける内なる生命の灯のようなものです。だからフォンセカの石の作品はやわらかな感じがします。この仕事を頼んだ頃、彼の息子が亡くなりました。彼は半生ぐらい仕事ができなかった。そんなことがこの作品の背景にあります。



97
□潮田友子 日本 1947-
Tomoko Ushioda Japan 1947-
車止め bollard

5cmの金属製の立体ブロックで積み上げられたふたつの形は入子のような積み木細工です。ふたつの角柱の上に相似形の小さな角柱が乗っている作品は、それがまたファーレ立川の全体でもあり一部でもあることを想起させます。それはさらにファーレ立川が世界を映す街でありたいという考え方につながってくるのです。どんな一滴の露にも世界は映っているのです。



93
□ヘンリー・ムンヤラジ ジンバブエ 1933-1998
Henry Munyaradzi Zimbabwe 1933-1998
車止め bollard

ムンヤラジの作品はジンバブエのショナ族に深く根付いた社会観からきています。ショナ彫刻は彼が創設した流派で、自律的な芸術運動として1950年代後半に発展しました。精神の本質は物質のなかに現れる。魂は石において捉えられ姿を現す、というものです。石に彫られた一本の線は、石そのものの力強さと、そこに宿る精神のありかを見せてくれます。



94
□竹田康宏 日本 1959-
Yasuhiro Takeda Japan 1959-
車止め bollard

竹田康宏は主として木材を使った作品をつくる作家です。そこからは氷河時代の記憶がよみがえってくるような時すらあるのです。作家は時代や民族性や思想を超えた人の感性に訴えかける仕事をしたいと考えています。その例として彼は「花を愛する行為」をあげ、この立川ではつばみを題材として花、葉、実を通していのちの表現をしたいと思ったのです。



95
□トマゾ・カッシャッラ イタリア 1951-
Tommaso Cascella Italy 1951-
車止め bollard

カッシャッラは細い金属を使って、深々とした空間をつくります。二次元としての線と面が三次元の空間をつくりますが、彼の場合、その面の部分をできる限りなくして立体的な空間をつくるのです。物質によってつくられる形は、形だけでなく、形以外の見えない空間に影響を及ぼそうとします。立体作品においては、形以外の弧がりをもち得るかどうかが重要になるのです。



96
□湯村光 日本 1948-
Hikaru Yumura Japan 1948-
「黒い柱」
「Black Pillar」
車止め bollard

湯村光は石を使ってシンプルな形をつくる作家です。今回は重なった石がズレて崩れながらお互いに組み合わせあった姿になっていますが、ここでは切る、削る、組み立てるという彫刻の基本作業がはまりわけるものになっています。作家のつくる形は自然のなかにあるものの発見から生まれることが多いのです。



98
□氏家慶二 日本 1951-
Keiji Ujie Japan 1951-
車止め bollard

氏家慶二は石を使って楽しい彫刻をつくる作家ですが、広場や公園全体の計画もしています。石彫の作家は世界各地で採れる石の種類と性質をよく知っていて、仕事で各地から石を取り寄せたり、時には採石場まで行って採る石を指示したりします。作家は埋まっている石のなかにすでに掘り起こすべき石の姿を見ているようです。